旅の重さ

素 九鬼子

角川文庫

旅の重さ

昭和五十二年五月三十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

著作者　素九鬼子

発行者　角川春樹

印刷者　橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　東京③一九五二〇八
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　新興印刷・本間製本

0193-144101-0946(0)

旅の重さ

素九鬼子

角川文庫
3923

われ神に申さん
我を罪ありとしたもう勿れ
何故に我とあらそうかを
我に示したまえ
（ヨブ記第十章第二節）

一

ママ、びっくりしないで、泣かないで、落付いてね。そう、わたしは旅にでたの。ただの家出じゃないの、旅にでたのよ。四国遍路のように海辺づたいに四国をぐるりと旅しようと思ってでてきたの。さわがないで。さわがないでね、ママ。いいえ、ママはそんな人ではないわね。ほら、世間の母親がよくやるような、あのヒステリイじみた金切声で学校へ走って行ったりなんか。そうよ、それはよく知ってるのよ。ただね、でもママはどぎまぎして夜も眠れないのじゃないかと思うと気が気じゃないの。けれど、この手紙が着いたらきっと幾分かは落付いてくれるとおもうわ、そうでしょう。

ああ、ママ、旅にでてはや三日になるわ。ああどんなに楽しいことでしょう、蒲団の上に寝ないで、草の上に寝るということは。おそらくママも昔はこういう経験があったにちがいないとおもうわ。だってママのような人が、こんなすばらしい味を知らないはずはないでしょうから。

本当はあの朝、ママに一筆書き残して出てくればよかったのね。けれどなぜかそれをするのが面倒だったの。その紙を見るなり、ママが外に飛び出して追っかけて来ないとも限らないと用心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

をしたことも事実だけれど。あの朝ママは朝早くから外へ出たでしょう。わたしにはわかっていたわ。男のところへ行ったんだってことは。寝ている枕元にクリームのにおいが漂ってきたときぴんときたの。だけどそんなことはどうだっていいの。ママが男のところへ行こうが行くまいが、それはママの自由なんですもの。四十女が恋をしてはならぬ理由なんてないんですからね。それにママの恋は、すなわち金に結びつくやつですものね。ありがたいことに、このくらいさいわいなことがあるでしょうか。ママの恋によって、わたしたち二人の生活が成り立っている。——おまえはよけいなことを口出ししないでおくれ——というママの顔が見えるようだわ。おこらないでね。わたしはいつも言ってるようにママが好きよ。皮肉なんか言う気はないの。ただわたしの口の悪さが、すぐにこうなってしまうだけなのよ。ママ、ママを本当に好きよ。旅にでて、ひとりぼっちになってみて、そのことがしみじみわかるの。本当によくわかるの。学校でたくさんの友達がいるけれど、わたしが心から友情を感じたり尊敬ができたり愛したりできる者は、ひとりだっていない。わたしはやっぱりママをたったひとりの友だと思う心が、日増しに強くなってくるの。ママはわたしの母親なんかではない、友だちなんだとね。だからなのよ、わたしがママに甘える気にはなれなくても、喧嘩する気にはなるのは。ママは鋭いし寛大だから、わたしの言うことをよくわかってくれるでしょう。

わたしがいなくなった晩、おそらくママはわたしの机の抽斗をひっくり返してみたことでしょ

う。おあいにくさま。中は殆んど空っぽだったでしょう。ちゃんと整理したの。焼くものは焼くし、捨てるものは捨てたの。とはいうものの、大した秘密のものがあったわけじゃないわ。男の子から貰った貧相な恋文が五、六通に、春画のようなもの四、五枚に――これはママのハンドバッグから昔盗んだものだけれど――、数学の百点の試験が三枚に、ほかはがらくたよ。ひからびた昆虫や虫めがねや、こわれたおもちゃの写真機、ニセのルビーの指輪、貝で作った宝船、いろんな色の消しゴムなど。これらのがらくたは、みんなママが夜店で買ってくれたものだわ。ああ、なぜ捨ててしまったりしたんでしょう。あのままにしておけばよかったのに！

けれど抽斗の中に小さなノートがみつかったでしょう。そうなの。あれはね、わざとあのまま残しておいたの。ママが読んでくれるということがわかっていたから。それにあのノートは、もう頁が字で黒くふさがっているから、この旅に持ってくる必要もなかったの。新しいノートを一冊買ったから。わたしはあの汚れたノートの中に書きこんである字を覚えているわ。あの下手糞な丸いわざとすましこんだ字を覚えているわ。一字一字に思い出があるの。わたしはあのノートに字をやたら不経済になんか使わなかったから。

ママ、昨夜もおそらく寝床の中で、ママはあのノートを一枚一枚めくってみたにちがいないわね。そしてぶつぶつ一人言をいっていたんではないの。図星でしょう。そんなことはわかっているの。離れていても、ママがどうしているかくらいのことがわからないでどうしましょう。

ママがあれを読んでくれた以上、もうここでくどくど旅の動機を書く必要もないわね。ただひとつ、旅にでる二日前に書きしるした詩のようなものを、そうよ、いちばん最後の頁の――をもう一度読んでみて。そうしたら、わたしがどのくらいくるしんでいたか、どのくらい異常な幻影に小突き廻されていたか、そこのところがわかってくれるでしょう。

骸骨

ある日　わたしはじぶんの骸骨と対座していた
骸骨はしじゅう無言であったが
洞穴のような暗い目の奥から
たえずほのかな笑みを送ってきた
白い骨の関節がきしんで
骸骨はわたしの手を撫でてくれた

一字一句まちがってないでしょう。よく覚えているの。わたしはね、これを書いた後で急に旅にでることを考えはじめたの。もうどうにもならなくなったの。わたしの体の中には、この骸骨がきしんでばかりいるのよ。夜中だろうと学校だろうと、両手で耳をきっちり押さえていなけれ

ばならないくらいだったの。もうこうなっては大して考えめぐらす必要もないと思ったの。旅にさえでてしまえば、一切の解決がつくような気がしたの。すがすがしい空気、見知らぬ土地。これこそが今のじぶんの薬だと思ったの。

けれどもね、ママの泣言を聞くのは真平だったわ。そりゃあママだって、わたしが筋道をたてて話せばなんとか話に乗ってくれたでしょう。でもその筋道を立てて話をするということくらい、わたしの苦手なことはないんですものね。お互が喧嘩をして腹を立てないですますには、こうやって先ず行動を起すよりなかったの。そう考えて、夜のあいだにリクサクや運動靴や合羽などを用意したの。そう、ママはあの夜も帰りが遅かったわね。だからゆっくりできたわ、旅仕度が。もんだいは、いくらかの路銀だったわ。いくら四国遍路のような旅をするといったって、多少の金はいるでしょう。もしか病気にでもなった時、それを考えたの。それから野宿場所をみつけられない時には宿に泊らなければならないし。そこで、ママの箪笥を小さがししたの。古いハンドバッグから九千円でてきたわ。半額だけは戻しておこうかと、しばらく思案したけれど、結局全額ポケットに入れてしまったの。ハンドバッグは、わざと乱暴に開いたままにして、ぶら下った着物と着物の間に吊しておいたの。ママが、盗人にやられたんではなく娘にやられたんだということが一目でわかるように。

あのお金は、ママが一週間前に男から貰ったものだってことはわかってるの。それにしても、

今度の男はしけてるのね。あまりサービスすることはないわ。それにあの男は、ママという人間をちっともわかっていないんだから。以前の男にくらべると、年が若くて男前がすこしよいというだけのことじゃないの。

ママ、わたし盗んだお金をポケットの中でくしゃくしゃにしながら、ママの鏡にじぶんの姿を映してみたの。ほっそりしていて本当にきれいな体をしているよ、おまえさん、すこし色はくろいけれど、というママのいつもの台詞をおもいだして笑ったわ。でもね、鏡の中のわたしの頬は、不思議なほどに赤くて、普段よりもずっときれいな顔だったわ。もしママがあのわたしの顔をみつけたら、黙ってはいないでしょうよ。あれ、まあ、この子はなんて美人なんだろう！　そういって、つい今しがたまで男と寝ていたにおいをぷんぷんそこらに漂わせて、腕組みしてわたしを眺めるにちがいないとおもったわ。ママのそういう時の魅力的な怪しい姿や声を、わたしはどうかした拍子によく想像できるの。そして、ママ！　ママ！　とおもうの。

まさか、ママはわたしがお金を盗んだためにごきげんをとってるなどとは思わないわね。いいえ、世間の母親ならばそうくるわ。そこへゆくと、うちのママは、あんな世間の女のように色あせたヒステリイの化物とは違うんだってことは、とにかくわたしが一番よく知っているんだけれど。

もう学校からママのところへ通知がきたかしら。ひょっとするとまだかもしれない。これまで

にもよくママに黙って学校をずるけていたことがあったから。けれどもう四、五日もしたら、きっとママのところへ直接先生が来るわ。あの老いぼれがやってくるわ。足をひきずるようにわざと歩いてくるわよ。そして、どうしてこう長いこと欠席しているのかときくでしょう。するとママは答えるでしょうね。ちょっと土佐の親類に不幸があって、娘を代りにやりましたとか何とか。こうなってくると、わたしなんかよりもずっとママの方が才能があるんだから。先生は疑い深そうに、いかにもけがらわしそうにママを見凝めるわよ。ママはそんな目にはびくともしやしないわね。ママの癖のあのパチパチする目で相手を見返すと、相手は五秒とママを見ていられないわね。そういうことで、ママがあしらっておいてくれるわね。今はちょうど夏休み前の試験だけれど、それがどうしたっていうの。試験試験って目の色を変えている連中くらい子供じみているのはないわ。要するに試験さえよければすべてよしという連中には、わたしのこの行動は気違いとしか映らないでしょう。だからくどくど説明したりすることはちっともないのよ。始めから嘘をついて相手にしなければいいのよ。その嘘が剝げたら剝げた時のことよ。ねえママ、その時にはその時で、ママも一緒に考えてくれるわね。

それにね、わたしもう学校なんかに戻りたくないの。やめたいの。やっとこのあいだ高校に入学したばかりだけれど。おまけに進学コースなんかに入って、夕方まで学校に残っていたりしたけれど。考えれば考えるほど時間の無駄だと思うのよ。学校生活というものが、少くともわたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

にとってはね。だからね、わたし学校をやめてママと一緒に家に居て何かするわ。それは旅が終ってから考えることにしましょう。

ママ、今ね、海辺に坐っているの。瀬戸内海の柔い波音がとてもいいわ。もやもやしている心に打ち寄せてくるこの波音は、ちょうど錆びた幾千という鈴が遠くの方で鳴っているような感じです。空は真青だし、潮風は吹くし、振り向くと四国山脈の峰は、くっきりと連なってひかえているの。遠くの村から夏祭のお囃子の稽古の音も流れてくるわ。今夜はこの近辺で野宿をするつもりなの。どこか寝心地のよい場所をこれからさがすの。夏草のきついにおい、ママもしってるでしょう。夜中にふとそのにおいにむせて目が覚めることがあるの。そのときほどわたしは満された気持になることはないわ。こおろぎや鈴虫や松虫や蟻や蛇も、わたしは決して殺したりしないの。いかに顔の上に這い上ってきたり、背中にごそごそ忍びこんだりしたって。

さてこの手紙をあのお囃子のきこえてくる村のポストまで入れに行きましょう。ここから大して遠くもなさそう。田んぼの中の一本路をまっすぐ行けばいいらしいわ。あの村で食べる物を少し買うつもりよ。パンとキュウリとトマトくらいをね。キュウリとトマトは川で洗って塩で食べるの。パンにはマーガリンを塗って食べるの。マーガリンは暑さでべとべとだけれど、ビニールでくるんであるから大丈夫。昨日は百姓がトマトをただで呉れたの。おそらくわたしを遍路とまちがえたのよ。麦藁帽を目深かに被っていたから人相がよくわからなかったのよ。それにね、真

白なトレーニングパンツをはいていることで、とても得してるの。全く灰色のもうひとつのズボンなんかはいてこなくてよかったわ。この白のズボンは、一見遍路の白装束に混同され易いという利点があるのよ。

じゃ、ママ、また書くわ。ママからは手紙を貰えないけど。そのうちにママだってだんだんわたしの手紙がおもしろくなってくるわよ。

追伸

行水をした後は、風邪をひかないよう早く着物を着ること。

二

水源地小屋というのは、旅人にとってころあいの野宿場所です。田植時ならば百姓たちが田に引く水を心配してこの小屋に出入りをするけれど、今は殆んど野に放ったらかしにしているの。わたしはこの小屋に目をつけたわ。こういう小屋は至るところの田んぼの中に、ぽつんぽつんと建っているの。錆びたポンプの機械や深い草の生えた井戸や、くずれ落ちた壁や、杉皮のむけた屋根。ママ、わたしは今日で三晩もこんな小屋に野宿しているのよ。

夜中に目が覚めたら、杉皮の破れ目からちょうど月が見えたわ。朱い大きな月でね、まるで大

きなミカンのようだった。耳を澄ますとね、山の音、地の音、海の音などが聞えるのよ。これこそ野宿をする者にだけ聞える自然の寝言なのよ。わたしがこう言うと、ママはにやりとして、ふんふんとうなずくでしょう。いつかママは、絵に音をだしたいと言っていたわね。ママも一度こうやって野宿をしてみるといいわ。きっと新しいものが描けますよ。夜の音があるなんて、わたしはこれまでに一度だって考えてみたことはなかったわ。夜汽車の汽笛や、夜鳴く鳥や虫の声なんかではないのよ。山や海や地が夜になるとそれぞれの音をだすの。本当にその音がきこえるの。嘘ではないの。起きだして、くずれた壁の穴に目をあてて、蒼白い夜の野をじいっと眺め渡していると、ひとつの唸りのようなそれらの音がきこえてくるの。更に耳を澄ましてじいっとしていると、それらのひとつひとつの異った音というものがわかってくるの。けれどその音をここで説明することは非常にむずかしいわ。その音色の識別には、魂の冴えと神経の刃が必要です。だからわたしは毎晩その山や海や地の音を別々に聞くわけではないの。大抵の晩は、ひとつの唸りのようなそれら自然の音をきくだけだわ。そしてその音はこちらの体にこだまして、ぶるんぶるんと響くほどです。その響きを超越して、もうすこしで自然の音のひとつひとつを嗅ぎ分けるという一歩手前で、いつもぐったりしてしまうの。

それからローソクに火をつけてそこらを照してみるの。藁束や割れた茶碗や古くなったわらじや破れたむしろが散らかっているわ。錆びたポンプには、いろんな落書がしてあるわ。人の悪口

や呪いや数字や子供っぽい性器の図などが、釘の先や炭などでしるしてあるの。わたしはしばらくローソクの燃えるにおいを嗅ぎながら立っているの。するとなんだかとても頭がくらくらしてきて目脂がいっぱいでてくるの。毎晩こうやって、野宿の興奮で不眠がつづいているからなの。昨夜もこの調子だったの。そこで煙草を吸ってみたけれどちっともおいしくないの。かといって外に出て歩くには疲れているしで、ぼんやりポンプに体をもたせかけて何時間も過したわ。

とうとう昨夜は朝まで眠れなかったわ。おかげで今日はひどい頭痛で、今は小屋に横になってるの。もうパンもトマトもないの。水ばかり飲んでるの。村まで買いに行く元気もないし、それほど食欲もないし、藁の上にねそべっていると、こおろぎが飛んできて顔の上でじゃれます。いつかママがこおろぎを糸で何匹もつないで天井から吊り下げてくれたことがあったわね。下から見るとおもしろい踊りを踊っていた。あのこおろぎたちの踊り、そう、あの踊りを今わたしの心は踊ってるわ。足や頭や胴を奇妙にくねらせてもがくあのこおろぎの踊りを踊っているわ。

ママ、今どうしているの。六畳でねそべって煙草をのんでいるのではないの。そしてわたしのことをかんがえているのではないの。かわいそうな娘よと。ママ、わたしも今ママのことを思っているの。かわいそうなママと。呪われた娘をもった母親と、呪われた母親をもった娘とのこの調和のとれた不幸な生活。ママはいつも言っているわね、わたしたちはこの不幸の中にしか幸福を見出すことはできないと。そう、う風に生れついているのよと。そうね、ママ。ママとわたし

の生活の中には、世間でいう狂気がそっくりそのまま正常に裏返されているんですからね。考えてみればおもしろい親子ですよ。恋人のような友だちのような敵のようなこの親子の関係は。けれどもママ、このままわたしが二度と再びママの前に帰ってゆかなかったら？　ありえないことだとは限らない気がするの。わたしはこのままどこまでもどこまでも歩きつづけてゆくの。そのうちに思いがけない生活がひらけてくるかもしれないでしょう。ひょっとして、わたしが旅の惰性にとりつかれてしまって足を止めることができなくなったら？　考えてみたら、わたしは小学生の頃からこういう旅を夢想していたのよ。ママにも漏らしていたでしょう。ああお遍路になりたいよと。そのたびにママは、うん、もうちょっと大きくなってからにしてね、今はまだあんたは小さすぎてよ、などと言っていたわね。まさかあれから数年たった今、突然ママに黙って旅にでたなんて、とてもママには信じられないのではないの。おそらくママは、秘密のうちにわたしが出て行くなどとは考えてもみなかったのでしょう。この娘が母親にかくしごとなんかできるものかと。このママの自惚を、わたしはちゃんと見抜いていたの。こういうママの自惚は、少々鼻についていたの。だんだん年をとっていろいろなことを知ってくると、ママの馬鹿さとわたしの馬鹿さとがよく解ってきはじめたってわけよ。でもそのくらいのことを大きく考えないでちょうだい。そのくらいのことでふたりが離れてゆくなんて考えないでちょうだい。ママが大馬鹿だからってきらいになることなんか死んでもできないことなんだから。ただね、いけないことは、わ

たしの片足が文学なんていう悪魔の世界に踏み込みはじめていることなのよ。これは本当に困ったことよ。そのくせどうにもしようがないのよ。ママと同じ絵の世界にでも踏み込めば、まだまだ救いの手はいくらもあったと思うわ。けれど文学じゃねえ……。それも真の才能あってのことならともかく、才能もないくせに、あせってあせって書きたがる。学校はいやになる。遊ぶのもいやになる。男の子もいやになる。喧嘩もいやになる。毎日毎日本にかじりついては、揚句の果はぼんやりしてしまうだけなのよ。するとね、むっつりひかえた自分の心の風景がみえるの。まるで殺風景ながらんとした心の風景が。

ママ、ママは十日程まえにわたしを殴ったわね。あの気持のよかったこと。大したわけもなしにママをののしったら、ママは真赤になって怒ってさ。毎度のことだから近所の者もしらん振りをしていたけれど、隣の青年だけは耳を澄ましていたのを知ってる？　壁にぴったり耳をくっつけて聞いていたのよ。夕方道で会うと、あの青年、怪我はなかったですかなんて間抜なことを言ったわ。いいえ、なんとも、とわたしが言うと、あきれた顔で行ってしまったけれど。やがてあの青年も、わたしたちの虜になるか、反対に気違いと一緒の長屋には住めぬとか言って出て行くかよ。

ああ、ママ、旅にでてきてどんなによかったでしょう。あの小さな薄暗い長屋の巣の中にとじこもって、明けても暮れてもくるしい思いをしているのは、なんとしてもわたしにはいやなこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton